

図版解説

呉宏筆 墨竹 図

故桑名鉄城氏の旧蔵品である本墨竹図は、このたび海を渡り、米人、カーター氏夫妻の蒐集に加えられることとなった。比較的遺品の少ない呉宏の作でもあり、湖州竹派についての論述を行ったこの機会に、時代的には大きなへだたりがあるというものの、題材の上では全く無縁の存在でもないもので、とりあえず簡略な紹介をしておく。本図は縦二四一・一釐、横一〇二・〇釐、絹本墨画の大幅であり、図の左側や上方に、

朱長方

上幕

羅々疎清、叢々煙雨、辟彼君子、或隱或見、或默或語、怒貌渴驥、脫兔處女、欲往從之、不知其所處。

蘇文忠公墨法畫于

雲林白馬三十六峯下 西江外史吳宏

白方	吳宏
朱方	私印
度遠	度遠

なる自題と款署がある。「蘇文忠公墨法」とあるので、湖州竹派との関連が多少なりとも指摘出来るわけだが、墨竹という題材をとりあげる場合に、文同や蘇軾の名が引き合いに出されることは、いわば当時の慣習であって、特に様式的に緊密な結びつきがあるとはいえない。墨竹が士人の専技であり、士人の主観表現の器であるという蘇軾らの主張は、北宋以降の各時代における様式的変遷という事実を超越して、墨で竹を画くということへの大前提となった。画中の題記等にみえる、文同や蘇軾の名は、その画の作者が北宋の文人達の理念を

わきまえているということの証しとみてよい。自題は、蘇軾の「疎疎簾外竹。瀏瀏竹間雨」の如き詩句に想を得たものであろうか。

呉宏は金溪（江西省）の人で、字を遠度、号を竹史と称した。他に、西江外史の号があったことは、本図によって知り得るところである。その生卒年は不明であるが、「生長於秦淮（南京）、幼好繪事、自闢一徑、不肯寄人籬落、癸巳甲午間、渡黃河、遊雪苑、歸而筆墨一變、縱橫森秀、盡諸人之長、而運以己意」と周亮工（万曆四〇〇、康熙十一）の讀画録（卷三）にあることから判ずれば、画風転換がおこったのは青壮年時代であろうから、癸巳甲午（順治十・一六五三・一六五四）に二十代から三十代であったとみてよいであろう。従って十七世紀の後半（康熙の前半）が彼の活躍期であり、実際、著録に記載される彼の作品も、年代の判るものは、みなこの期間の作である。それらのうち最も年代の晚いものは金陵八家冊（康熙十八年・一六七九・明清画家印鑑所載）であるから、周亮工よりもやゝ若い世代に属する人と考えてよからう。また、宋琬（万曆四二〇、康熙十二）の安雅堂文集（卷六）に「題吳遠度畫卷」なる一文がある。これは宋琬が周亮工に呉宏の画卷をみせられて撰したものだ、そこに「遠度爲余言、曾策蹇騶過大梁之墟、訪信陵公子侯嬴朱亥之遺跡、歸而若有所得焉」という記述がある。これは先にあげた周亮工がいう「渡黃河」と照応する事実であろう。周亮工は龔賢をはじめとする多くの画人と親交のあった人で、それは周亮工の文集・頼古堂集に徴することができ、呉宏に与えた詩もここに（頼古堂集卷十）見出せる。

與吳遠度、雲林白馬峰予與遠度家在其間

幕外青霞自卷舒 依君只似住村墟

枯桐已碎猶爲客 妙畫通神獨示予

過雨間拖花徑杖 臨風對展柳陰書

深卮莫戀青溪好 白馬雲林舊有居

雲林山は、江西省金谿県の東方四十支里にある山で、上に三十六峯があり、白

馬郷はその麓にある(金溪縣志卷一)。周亮工と吳宏は雲林山の近くに住んでいたわけであり、「生長秦淮(南京)」という先の周亮工の記述からすれば、吳宏は成人ののち、故郷金溪の雲林山の麓へ帰ったこともあったとみられる。従って周亮工の記述をうけた秦祖水の桐陰論画が単に「遠度江西金溪人、後移家金陵、住雲林白馬間」とのみ記し雲林白馬を金陵近辺の地の如く扱うのは不正確といえる。

本図も款記に「雲林白馬三十六峯下」とあるから、郷里、金溪にあった時の作と認められる。制作年代は不明であるが、既に安定した技法を示しており、画風転換の契機となった北遊(順治十一年)の後の作とだけはいえよう。

吳宏は所謂、金陵八家の一人に数えられている。張庚が国朝画微録(巻上)で云うところでは、龔賢、樊圻、高岑、鄭喆、葉欣、胡造、謝蓀、及び吳宏の八人がそれにあたる。そして、現在、一般にはこれが行われているが、異説がないわけでもない。袁枚修・江寧縣新志(乾隆十三年)の芸術伝(卷廿三)には、

一時南都知名之士、如陳中立、吳遠度、樊會公、鄭方魯、蔡霖滄、李又李、武忠伯、高畏生、樸園先生品題曰金陵八大家。

とあって国朝画微録と共通するのはわずかに三人である。周亮工がこのように品題したとあるが、現在、周亮工の文集、読画録、印人伝、書影等にその拠所は見出せない。今後、考究するべきこととしてここに提示しておく。ところで、金陵八家は、地縁的なグループであり、必ずしも様式的な統一があるとはいえないが、龔賢、鄭喆、吳宏等の作には、情趣的な表現に流れることをおさえた、一種の骨太い重厚な感覚がみとめられる。

本図の画風も一言で断するならば、やゝ大味である。自題にいう、雨中に煙る竹林のさまは、濃墨と淡墨の対比によって追求されているが、その形態の明確さが、本図を情趣的表現からひきはなす。吳宏の作品は「墨汁淋漓」(図録纂)とか「吳君潑墨雄江東」(国朝画微録)とか評されて、その墨法を高く買われ、また「其畫墨竹飛舞絕俗」(図録纂)「筆意縱橫、無瑣屑態」(歐鉢羅室書)の如く、その力動的な表現も注目されていた。こゝでも、竹の葉を画く、墨汁を多く含む図太い、抑揚をおさえた筆致がまず目をひく。たゞ、画面全体にみられる筆法そのものはかなり単調で、下方の草や、筍、竹の細枝などには、同じ形の筆——下よりのび上る硬く鋭角的な線、さらにそれが頂上で急に折れて止ま

挿図

吳宏筆 墨竹図(自題款署)

るものとの二種——がくり返し用いられている。そして節を画く、濃墨の筆をかえして止める描写もこれと同じ手法によっている。従って画家の意図は微妙なニュアンスを追うものではなく、コンベンショナルな筆致のうちに、力動的表現をねらうものと解される。構図も、竹の上部を画面の枠で切り下方の石の描写にかなりの重点をおく、明末清初の墨竹によくある型であるが、斜に画面をよこぎる竹の幹と、これに並行し或いは交差する竹葉の表現が大きな動きを画面にもたらし、この点では傑出した出来ばえといえる。自題の書風は、明末の狂逸なものゝ影響を蒙っているが、本格的な書家の風ではない。たゞ頼古堂尺牘新抄二選（巻四）に収められた呉宏の手紙をみると、書についても一言をもっていたらしいようである。豪邁であったと伝える呉宏の性格（読画録・四巻）は書画の双方から十分想像出来る。

なお、邵松年の古縁萃録は呉宏の山水冊をとりあげ、その後記に「山法樹法自成一家、於小品相宜、未知大幅何如也」という。とすれば、呉宏の大幅の遺品は少なかったのであろうか。本図は、この点でも重視すべき作であろう。箱には、

吳遠度墨竹縑本大壹幅

とあり、蓋裏には鉄城氏が自ら

吳宏墨竹、其筆力雄健、墨氣淋漓、有分雲裂石之勢、真逸品也、桐陰論畫曰、名宏字遠度、江西金溪人、後移家金陵、住雲林白馬間、同時有聲者、龔賢、樊圻、高岑、鄒喆、葉欣、胡造、謝蓀、爲金陵八家、鐵城箕記」

と記している。なお付言すれば鉄城氏の蒐集品図録である九華印室鑑藏画録には本図は収載されていない。

（戸田禎佑）

図版要項

一 華岳筆 秋声賦意图（原色版） 大阪市立美術館蔵

紙本淡彩 縦九三・七浬 横一一三・三浬

川上涇「華岳の秋声賦意图」参照

二 玉潤筆 廬山図 東京 吉川文子氏蔵

絹本墨画 縦三五・二浬 横六二・七浬

三 同 洞庭秋月図 石川 矢田松太郎氏蔵

紙本墨画 縦三三・六浬 横八五・四浬

四 同 山市晴巒図 東京 吉川文子氏蔵

紙本墨画 縦三三・六浬 横八三・三浬

五 同 遠浦帰帆図 東京 黎明会蔵

紙本墨画 縦三〇・六浬 横七六・九浬

二一五 鈴木敬「玉潤若芬試論」参照

六 吳宏筆 墨竹図 ニューヨーク カーター氏夫妻蔵

絹本墨画 縦二四一・一浬 横一〇二・〇浬

戸田禎佑 図版解説「吳宏筆 墨竹図」参照